

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13124

研究課題名（和文）テキスト計量分析を用いた中国語教科書語彙に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Vocabulary in Chinese Textbooks Using Quantitative Text Analysis

研究代表者

阿部 慎太郎（ABE, Shintaro）

近畿大学・法学部・講師

研究者番号：70759836

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国語教科書語彙をテキスト計量分析し、教科書語彙の特徴と偏りを探り、今後の課題を見つけることを目的とした。教科書のテキスト入力業務を委託したことで大量の中国語教科書及びその他関連書籍のテキストデータを得ることができ今後の研究に繋がる。一方、分析ソフトKH Coderに関しては、有償サポートを受けながら分析を進めた結果、中国語形態素解析及び品詞分類の精度が十分ではないことが判明し、予定していた大量のデータを使った分析を断念せざるを得なかった。そこで、急遽方向性を変えて分析対象となる教科書を数を減らし、KH Coderを使わず教科書語彙の特徴、偏りを分析し、今後の課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、中国語教科書は数えきれないほど出版されており、一見多様化しているように見える。しかし、本研究により、教科書には大きな偏りがあることが判明した。この偏りは中国語教育において、教員、出版社が何十年もの間「常識」とされてきた部分であるが、現在の中国語教育の学修環境から考えると、変えていくべき部分でもある。それを本研究で明らかにできたことは大きな成果である。本研究で行った考察の視点、結果は、今後の中国語教科書はもちろん、中国語教育での教授法研究、教材開発研究においても、重要な視点になると考える。

研究成果の概要（英文）：The primary objective of this study is to conduct a quantitative text analysis of Chinese textbook vocabulary, exploring its characteristics and biases, and identifying future challenges. During the research period, we outsourced the task of inputting textbook text, which allowed us to obtain a large volume of text data from Chinese textbooks and related books, contributing to future research. However, regarding the analysis software KH Coder, despite receiving paid support, our analysis revealed that the accuracy of Chinese morphological analysis and part-of-speech classification was insufficient. Consequently, we had to abandon the planned analysis using a large dataset. Therefore, we urgently shifted our approach by reducing the number of textbooks analyzed and examining the vocabulary characteristics and biases without using KH Coder. This revised methodology enabled us to identify the features and biases of the textbooks and outline future challenges.

研究分野：中国語教材分析研究

キーワード：中国語教科書分析 中国語教育 中国語語彙

1. 研究開始当初の背景

大学、高校における中国語学修者と一言で言っても、そこには様々な学修環境がある。学修環境が変われば、当然1年間の学修到達目標は変わり、教科書に求めるものも異なる。そのため、中国語教科書には多様化が求められる。現在、既存の中国語教科書は、数えきれないほど出版されており、概観する限りでは、一見多様化しているように見える。しかし、教科書の語彙、文法、または場面設定、会話文など、詳細にみると、何十年前から中国語教科書には変わらない偏った部分が多く存在する。この偏りがある学修環境においては「使いにくい」と感じる原因になっているのではないだろうか。これまで、中国語教育ではまだ教科書分析が十分されておらず、教科書もこうした客観的な視点から構成、内容を考えることはされてこなかった。そこで、中国語教育において、今後の中国語教科書の課題は、既存の教科書の特徴を多角的に考察することであると考え、本研究を始めるに至った。

2. 研究の目的

現在、日本の大学、高校で使用されている中国語教科書の喫緊の課題は、内容の多様化であると考え。中国語初級教科書は、現在数えるのが困難なほど出版されている。内容も一見多様化されているように見えるが、ある部分においては多くの部分で似通っており、言い換えるとそこは中国語教育で長年「常識」と考えられてきた部分であるとも言える。そこで、本研究は、既存の中国語教科書の語彙、文法、会話文等における偏りを見つけ出すことを主な目的とする。この偏りを見つけ、中国語教育全体で共有することで、今後の中国語教科書の参考になる。また既存の教科書を使用している教員にとっても、その偏りの部分がわかれば、どのようにその部分を補うかが明確になってくると考える。

3. 研究の方法

中国語教科書の偏りを見つけ出すためには、大量の既存の教科書を多角的に分析する必要がある。そこで、本研究ではまず教科書のテキストデータの入力を行った。その後、テキストデータをもとに、多角的に考察し、偏りのある部分と多様化されている部分を浮き彫りにする。そのために、有効的な方法が計量テキスト分析であると考えた。この偏り部分は、ある意味中国語教育では何十年と変化のない部分、いわゆる「常識」的な部分であり、我々教員は無意識のうちにフィルターがかかってしまっていて見えにくくなる部分である。そこで、本研究では計量テキスト分析ソフト KH Coder を使用して、客観的に傾向と偏りを見つけ、その後研究代表者が中国語教育の視点から今後の課題を導き出す。なお、KH Coder を用いた中国語の計量分析研究もおこなわれているが、中国語教育の分野においてはまだ十分な研究はなく、まず KH Coder が中国語教育で使えるのかということから始める必要があった。研究代表者は、KH Coder についての知識がないため、初年度、二年目では、有償サポートを受け、専門家の意見を伺いながら KH Coder を使用していく。主に、KH Coder の特徴を生かして、教科書、品詞、場面設定などによる共起状況を探り、多角的に教科書の特徴を探る

4. 研究成果

(1) 研究の遅れ、および研究手法の変更

はじめに、本研究は当初の予定から研究が遅れて1年間延長した経緯、そして当初予定した KH Coder を使用した分析を一部断念し、異なる手法で研究を進めた経緯について説明する。本研究の主な作業として中国語教科書のテキストデータ入力にあり、この入力業務は時間を費やすため研究代表者以外に1-2名の作業依頼を予定していた。しかし、研究期間中、コロナ禍で約2年間作業を依頼する方と対面での作業ができず、それにより様々な問題が起り大幅に遅れが生じた。結局、当初想定した作業量は入力できなかつたが、しかし一定数のデータは入力できたため、本研究を遂行するのに最低必要限のデータは取れたと考える。

次に、KH Coder の形態素解析ソフトの精度の問題について報告する。当初、KH Coder を使って多角的かつ詳細に中国語教科書語彙の特徴と偏りを探るために、教科書、品詞、場面設定ごとの傾向、また教科書とその他教材(絵本、フレーズ集など)との語彙の比較を行う予定であったが、KH Coder の形態素解析ソフトの精度の問題により、十分な結果が得られなかつた。初年度、二年目で、KH Coder の有償サポートを受け、本研究の目的に必要な形態素解析、品詞分類について KH Coder の精度及びどこまで分析が可能か、専門家のアドバイスをもらいながら、本研究のテキストデータを使って考察した。しかし、結果は現在 KH Coder に搭載されている形態素解析ソフトの形態素解析及び品詞分類の精度は、一般的な使用では問題ないが、本研究を含めて、中国語教育、中国語言語学の専門的な研究目的では、十分な精度を有していないという判断に至った。それによって、当初予定した研究目的、手法とは大きく異なる方向転換が余儀なくされた。しかし、この結果は、決して悲観的なものではなく、「現時点では使えない」という結果がわかつたことは、中国語教育、中国語言語学の研究者にとっても有益な情報になると考える。研究期間中に成果をあげることができなかつたが、今後中国語の形態素解析に精通している専門家と

協力し、機会をみて報告したい。

こうした状況下において、本研究は当初の目的から方向転換した。主な変更点として、まず分析対象を中国語教科書に絞り、他の教材との比較は断念した。また、研究代表者の目視によってチェック、分析ができるように分析する教科書の数を制限した。初年度、2年目で、KH coderの有償サポートを使い、専門家のアドバイスを受けながら、KH Coderの形態素解析の精度を考慮して、特徴が見出せる点をいくつか見つけ出した。その結果から、3年目、4年目では、その点を重点的に深く調査、分析することに分析した。

当初の予定より、対象となる教科書の数、比較対象、並びに分析手法は大幅に限定せざるを得なかったが、中国語教科書の特徴、傾向を探り、今後の中国語教科書の課題を示唆するという当初の目的は遂行できた。また、本研究の研究手法、考察の視点は、今後の中国語教育にとって一つの新しい視座になったのではないかと考える。

(2) 研究成果

ここからは、研究期間での研究成果をまとめる。

①中国語初級教科書の文法項目の特徴、偏りと今後の課題：助動詞“要”、“想”を例に

KH Coderを用いて使用頻度や特徴語などから中国語教科書の語彙を調査した際、特徴のあるものの一つに助動詞“要”、“想”が上がった。助動詞“要”、“想”は初級文法として重要な語であるが、教科書によって提示の仕方が大きく異なることがわかり、本研究で深く考察することにした。

助動詞“要”、“想”には複数の意味項目があるが、KH Coderで概観したところ、教科書によって扱う意味項目の数、例文の出し方、扱う課などに違いがあることがわかった。そこで、本研究では、中国語初級教科書30冊を対象に、この点を詳しく考察した。その結果、助動詞“要”、“想”の扱い、説明は、教科書ごとでそれぞれ特色を出しており、多様化している部分もあるが、一方で、場面設定とは関係のない意味項目まで扱っている教科書が多くみられた。これは、中国語教育が文法を軸に置いた教育の進め方が起因していると考えられる。

もちろん、文法を理解することを軸位置いた教科書であればそれでよいが、対象となる教科書の多くは各課ある場面での表現が言えるようになる、という目標設定を掲げている。にもかかわらず、助動詞“要”、“想”の文法項目では、その場面とは全く関係のない意味項目を提示していることが多い。具体例を挙げると、「レストランの場面」「我要吃〜。」（私は〜が食べたい。）という表現を学習することが目的の課があるとする。その課では、文法ポイントとして助動詞“要”「～したい」を扱うのは自然である。しかし、助動詞“要”の「～しなければならない」「～する予定だ」さらには、“不要”「～するな」の意味項目は直接関係のないものである。しかし、こうした項目を関連づけて提示する教科書が少なくないことがわかった。こうしたことから、今後中国語教科書の多様化という面で少数派のタイプは、場面設定を軸に置いた教科書であると言える。本研究の視点、方法は、今後他の項目でも同様の手法で調査でき、これまでにはない新しい視点であると言える。

②講演

本研究を通して得た知見をもとに、高等学校中国語教育研究会2023年全国大会、朝日出版社企画の教科書の使い方に関するワークショップにおいて、中国語教科書の使い方、あり方の講演を行った。これらの講演により、大学中国語教育以外に、高等学校、出版社への示唆にもなり、中国語教育全体への貢献につながると考える。

③朝日出版社「入門教科書お助け検索」監修

<https://text.asahipress.com/chinese/otasuke/shokyu/search.html>

本研究を通して得た知見をもとに、朝日出版社の中国語初級教科書の検索サイトに関して監修を行った。朝日出版社の初級教科書は、現在80冊以上出版されている。しかし、従来の検索方法は、「会話、読解中心」「検定対策」程度の検索基準しかなく、これでは教員が教科書選定の際の参考にはなりにくい。本研究は、こうした教員の教科書選定の基準を作ることも一つの目標であったため、朝日出版社に企画を打診し、監修を務めさせていただいた。具体的には、これまではなかった詳細な検索条件を提案し、研究代表者、中国語教育の専門家、出版社で、その基準に従って教科書を分類することを行った。これにより、これまで以上に詳細な検索が可能となった。この検索サイトは、まだ未完成であり、今後も引き続き関わっていくと同時に、教員向けのワークショップも行っていく予定である。

(3) 今後の課題と展望

本研究は、コロナ禍の影響、そして中国語形態素解析ソフトの精度の問題もあり、予定から大幅に遅れ、また異なる手法での研究となったが、当初の目的である「中国語教科書の多様化」を示唆するという点では、目標は達成されたと考える。また、本研究では、今後の研究につながる部分が大きく、有意義な研究となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 阿部慎太郎	4. 巻 14 (1)
2. 論文標題 中国語初級教科書における文法項目の現状と課題 助動詞 “想”、“要” を例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近畿大学『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』14 (1), pp.1-21	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部慎太郎
2. 発表標題 問題提起：良い教科書とは？
3. 学会等名 高等学校中国語教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------